

SAMPLE

break out of the world.

## 人物説明

主人公 = 咲月森夜（さつきしんや）:

流されなさそうで流される、流されそうで流されない。クールでビターな落ち着いた雰囲気と端正なマスクで、オトナにあこがれる女子生徒と一部の男子生徒から絶大な熱狂的人気を誇る八高のキングだが、その実態はマイペースすぎる変人。

転校したてのころは特捜隊女子からも恋愛対象に見られていたが、最近では「咲月くんてトカゲに似てるよね」「ああ、似てるね。いきなり機敏な動作になって人を驚かせるところとかソックリ」などと直接言われるほどの恋愛株大暴落を見せる。後輩票はギリギリ確保らしい。

なんの因果か親友兼相棒の花村陽介へと新たに恋人という肩書きを叩きつけ、事件解決後はまったりと甘い生活を送っている。

## 花村陽介

見栄えは良いがおもに下半身への災難が耐えず、ノリでシモネタを発するなど、ウッカリガッカリが目立つ八高の王子様。人生初にして最大の親友である咲月とは相棒兼恋人の仲。しかしマイペースな咲月と対照的に色々と考え込む繊細な性質で、結果常時情緒不安定気味。だが、基本的には根明で、謎の生き物・クマを自宅に居候させたりと面倒見も良い。遊ぶことが大好きなハツラツとした青春少年。悩み事が気分によって浮いたり沈んだりするタイプ。

咲月の変人ぶりも受け止めて一生の付き合いになってもいいと思うほど惚れこんでいる。

そんなバカップルな二人の逃避行なお話です。

01.

立春が過ぎた頃。そろそろ日差しも和らぐ季節に差し掛かろうとしているが、周囲に目立つた建物もなく、寒風が吹きすさぶ屋上で過ごすにはまだ厳しい気温だった。

そんな中で過ごそうという酔狂な生徒は少ない。

昼休みの屋上にはぼつぼつとしか人影はなく、咲月森夜はがらんと開けて余計に肌寒さを感じさせる空間に視線を這わせた。

見渡した世界はコンクリートで固められて灰色に満たされ、硬質な石でもって冷たく閉ざされていた。

ふ、と彷徨させたモノクロームの視界に、甘いキアラメル色が映る。

「ごつそーさんっしたー!」

「おう、おそまつさま」

森夜の隣に座っていた少年が行儀良く手を合わせ、ぺこりと挨拶する。弁当箱を重ねて仕舞い、につこりと笑いかけてきた。

花村陽介。森夜がこの街に来て得た、かけがえ

のない仲間のひとりだ。

「うんまかったー」

そう言つて満足そうに笑う顔は、家の前に居ついてしまった野良猫を思い出させる。

「陽介が気に入ったみたいで、よかった」

「え? 俺、咲月のつくつてくるメシは全部美味いと思つて食つてるよ」

きょとんと見開かれる優しく垂れた丸い瞳は、無防備で警戒心を感じさせない。

年よりも幼く見えるその表情を好ましく思う。整った面と愛嬌のある仕草に惑わされるが、なかなか人に心を許さないこの友人が、自分に見せる子供のような表情が嬉しい。

「なーに人の顔見て笑つてんだよ」

「いやいや、作り甲斐があるようなないような、と思つて」

「あるある。俺が喜ぶじゃん」

そう言つてけらけらと笑う。本当に猫のようだとリードマークのヘッドフォンに半ば隠された長い首についと指を這わせるが、不思議そうにしながらも拒む素振りは見せない。

女の子のように柔らかくも丸くもないその少年特有の硬さが掌に馴染むのは、触れた回数にせい

だろうか。森夜は心持ち頬を緩めた。

「くすぐってえ」

「んー」

首を疎められたので、やり場のない指は頬のラインに添えられる。

「嫌だった？」

「うーん。あつたけーから、いいんだけどさ」

そう言つて頬を緩め、半歩分尻でいざり近寄る。どうやら風に晒され少なからず寒さを感じていたようだ。温もりを頼つてのこのこと寄つてくる陽介に苦笑いする。

「お前はもう少し警戒したら？」

「相棒相手に何を警戒すんだよ」

「そうだなあ」

こついうことされたり？

森夜を見上げたことによつて無防備になつた首筋へ、するりともう一方の手が進入する。

「ひぎやつ！」

「ははっ」

先ほどまで身体を支えていた方の掌は、コンクリートに体温を奪われきつて凍りついたように冷たい。

「おーまえ、手、冷たい！」

「だから警戒したら、つて言つたのに」

普段は鷹のように鋭く険しい瞳が三日月型に変わる。うつそりと意地悪く笑つ森夜に、陽介は最初こそぎやあぎやあと拒んで身体を擦るが、やがて諦めてその身体を明け渡した。

「つたく、子供みてえなことしやがつて」

「お？ 抵抗しないんだ？」

「抵抗してもお前やめないもん」

ぐつたりと弛緩した身体のまま、透明な視線は深夜を直線で結ぶ。

「よくわかつてるな」

「相棒のことだしな」

「ははっ。おれも優しい相棒のことだから、きつと許してくれるつてわかつてたぞ」

「ふうん。その取つて付けたように褒めるの、悪い男つばいぜ」

つんとそつばを向く陽介は拗ねているようにしか見えない。

森夜はくすくすと笑いながら、陽介の体温を奪い温まつた手を引き抜き、両手で彼の頬を包み込む。

「おれに騙されてみたい？」

「ばーか」

「馬鹿とはなんだ、馬鹿とは」

ぐにと頬を摘むと薄い肉の感触が伝わる。

「ぶあーは、ぶあーか」

「何言ってるかわかるけどわからん」

「ぶあー……、あ」

むきになって森夜を罵る陽介の唇から、てろりと涎が零れた。

「おっと」

ついと顔を寄せ顎に唇を寄せる。驚き身を強張らせたが、構わずに舌で拭ってやった。

「ちよつ、おまえ……誰かに見られたら」

「誰も見てないことは確認済み」

そう言つてすぐに離れたが、陽介は耳まで紅潮させて目を丸くしたまま、森夜の腹目掛けて足を振り上げた。結構な力を込められて迫ってきた足に対し、持ち前の瞬発力と咄嗟の判断で身体を奥に引き、その一撃を正面から食らわず逃れることに成功した。

手ごたえが弱かったからか、ちつと無遠慮に舌打ちされる。森夜はそれでもにやと悪戯に笑った。

「いたいよー」

「嘘つけ、ほとんど避けただろ」

「信頼してる相棒に蹴られた。心が痛い」

陽介は不機嫌そうに口を引き結んでいたが、顔を覗き込んでくる森夜に耐え切れず、ふつと目を細めた。

「似合わねえから、その悲しそうな顔作るのやめろよな！」

そう言つて森夜をごく軽く小突き、こてんとコンクリートに細い身体を横たえる。そのままの体制でポケットから取り出した携帯電話を弄った。

「そろそろ昼休み終わるな」

「うん……」

「なんだ？ 眠くなつた？」

「んん……」

イエスともノーとも取れない呻き声を返す。

携帯電話に表示された時計を見ながら、こしこしと目を擦る陽介の顔の上に手を置いた。

「目が傷つく」

陽介が瞬きをするたびに、睫毛がふわふわと掌をくすぐる。ぱちぱちと数回瞬いた後、そつと閉じられる瞳の気配が伝わる。

かちゃん、と投げ出された携帯電話が耳障りな金属音を立てた。

「こんなところで寝たら風邪引くぞ」

「寝たら、授業出られないな……」

ぼんやりと予鈴が鳴るのを聞いたふたりは、それでも動く気持ちになれなくて、屋上から去っていく数人の生徒の後姿を見送った。

「……全員行った、か？」

「こんな寒い日の屋上でサボるうってやつは、そうそう居ないだろうな」

「それもそっか……」

くん、と腕を引かれ、陽介の隣に寝転がる。

「コンクリ冷たい」

文句を言う森夜に、陽介は身体を反転させて擦り寄ってくる。

「じつとしてれば暖かくなるだろ」

「なんだ、ほんとに眠いのか？」

普段よりも少しだけ高くなった体温と、温もりを求めて甘えてくる親友の姿に少しだけ驚く。乱れたキヤラメルブラウンの髪を掻き上げてやると、丸い額が晒された。

「んん、まあ眠いっちゃ眠いよ」

「……寝る？」

「うーん……」

だんだんと不明瞭になってくる言葉に、森夜は苦笑いしてその身体を抱き寄せた。

寛げたままの制服に触れ、より近い部分で温もりを感じられることに気付いた陽介が臉を伏せたまま胸に飛び込んでくる。

そっと首の下に腕を潜らせ、冷氣から護るようにしてやり、男にしては細い身体を抱え込む。それを享受した陽介はもそもそと寝やすいように位置を調節した。どうやら本気で寝入るつもりらしい。

「これ、誰かに見られたらびっくりするだろうな」

この寒空の下、男がふたりで絡み合うようにして寝入っていたら、それは奇妙としか言い表せない光景だろう。

「お前、上級下級に同級生、男女も関係なくモテてるからな。はは、俺、嫉妬されそう」

「……おれが引越した後にイジメられたら連絡しろよ」

半ば本気で口にしたが、おそらく陽介は何を言うのだと一笑に付すだろうと思っていた。

「……うん」

しかし彼は森夜の予想に反し、神妙な態度でこっくりと頷き、視線から逃れるように制服のシャツに顔を擦り付けてくる。

「陽介？」

「ちよつとだけ寝る」

本鈴が鳴り辺りが静かになる。しばらくすると腕の中に抱えた陽介の呼吸がほんの少しだけ乱れ、本格的に寝入ったことを伝える。

完全に無防備な姿を晒して丸めた身体を、腕に閉じ込めることを許されているのだと思えば悪い気はしなかった。

例え風除けにされているとしても。

それでも彼がそれだけの理由でここまでべつたりと甘えてくることは、考え難い。

「そんなに無防備で、本当にいいのか？」

口ではうそぶいても、彼の目元にうつすらと浮かぶ疲労の証と自分に対する信頼を実感しているのは、悪戯をするのは憚られた。

「おれもちよつと寝るかな……おやすみ」

返事はない。

しかし無意識なのか、森夜が身体を寄せるとより密着できるように開かれる身体が愛しい。

そのかたちの全てを覚えておきたい。

三月。森夜がこの学校に居られる期間が、まもなく終わろうとしていた。

陽介が目を覚ましたとき、傍らで眠っていた相棒はすでに起きて彼の顔を覗き込み、口端に微かな笑みを乗せて寝顔を見守っていた。

見慣れぬ光景に、寝起きの頭は情報処理しきれずにくらりと貧血に似た眩暈を引き起こした。

「おはよう、陽介」

「……おはよう」

世界で一番好きな声は、低く響いて身体と接している部分から振動となって入り込み、陽介の身をどろどろのなにかに変えていく。

腹の中心が熱くなり、重い熱が堆積する。

それに流されそうになるのを自制して、森夜の体温から少しだけ遠ざかった。

起き上がるのに手助けしてくれる大きな掌の感触を感じながら、努めて不自然な部分がないように立ち上がる。

森夜の視線が背中に向くより前に、くるりとターンして視線を合わせた。

「なあ相棒。大変だぜ」

大変だ、というわりにはその顔には焦りや困惑は含まれていない。ただただ自分と視線を交わし、陽介は無表情にそこに居た。

「世界は、あと三日で無くなっちまうんだ」

身じろぎもしない森夜に構わず、陽介は屋上のフェンスに背中を預け、肩を竦めた。

「なあ、どうしようか？」

甘ったるいテノールが、幼子のように無邪気に森夜に問う。

「あと、三日しかないんだ……」

そう繰り返され、森夜はふむと顎を撫でた。

「じゃあ、駆け落ちしようか」

「カケオチ？」

「あり金全部持って、電車で遠いところに行つて、陽介だけ見て三日過ごすよ」

言つと、陽介の瞳が揺らぐ。

「他のやつらはどうすんの？ 堂島さんと菜々子ちゃんは？」

「仲間も家族も大切だし、大好きだけど」

ひとつ息を吸つて、続けた。

「今は、陽介と過ごしたいと思つてるから」

森夜の表情は変わらず、水面のように凧いだままだ。

そこから色々な感情を読み取るのは難しく、陽介は目を細めて彼の顔を眺めていた。

ひよいと立ち上がりフェンスの下に座り込ん

だ陽介を追い込むようにして、目の前に座る。全てを断ち切り、自らの腕に誘い込む。

蛇の視線に、背筋がすつと冷えた。

それは不快感を陽介に与えず、ただ気持ちを高ぶらせるだけの行為になる。

「ほんとうにそれでいいの？」

「いいよ」

彼との位置は本当に近くて、唇が動くたびに口内の舌が唾液を伴つて轟く音が耳に届く。

一瞬の熱と体液の交感に震え、陽介はできるだけ綺麗に見えるように表情を作り、笑った。

「じゃあ、今夜、駅前で」

だから、森夜も静かに頷いた。

「わかった」  
そういうことになった。



02 .

都会の夜と田舎の夜は全く違つ時間を流れているようだ。

薄暗い街灯は地面の全てを照らす事もままならず、遠目に見ると点々と燈る提灯のように幻想的な風景を感じさせる。

森夜はこの田舎町が夜に見せる、ほんのりと暖かいがどこかに毒を潜めた表情が嫌いではなかった。

夜釣りに出かけた帰りは、人影のない道の空気を独り占めにして、湿つた闇の匂いを嗅ぎながらのろろと歸路を辿つたものだ。そうやって自分の中の汚いものが呼吸と共に夜の空気に溶け込んで、朝陽が昇るころには蒸発して健やかになる気がした。

そんなことを考えながら、いつもとは違う夜の道を辿る。

目的の場所に着く頃には、周囲も少しだけ開けて街灯の数も増えていた。田舎町らしい、寂れた無人駅。終電ギリギリの時間を見計らつて待ち合わせをした。

ホームの手前、小さな階段に彼はちんまりと腰掛けていた。

「おっそいぞ」

「ぶつぶ、時間通りです。陽介が来るのが早すぎなんです」

「ちえっ」

見慣れたジャケットにヘッドフォン、洗いざらしのジーンズにブーツ。手荷物はほどほどの大きな鞆がひとつ。見た目には、どこかの友達の家泊まりに行く程度の軽装だ。

「荷物少ないな」

そう言つてホームへ歩き出すと、追いかけて来た陽介が背中へ手を掛けてくる。

「お前なんてほぼ手ぶらじゃん」

「詰め方が上手いんだよ」

「さすが」

「まあ、着替えくらいしか持つてないし」

「コンビ二無いとこなんて今は珍しいしな」

「そうそう、電車に乗ればなんでも手に入るような都会にいけるのですよ」

「はは、その言い方なに？」

滑り込んできた電車に、軽口を叩きながら乗り込む。車内には見渡す限りでは乗客も居ない。平

日深夜ともなれば、こんなものだろうか。

「誰かに見られたらどうやって言い訳しようとか、色々考えてたのになー」

ふふ、と笑う陽介は鞆を隣りに降ろして席にどっかりと座り込む。

その横に拳ひとつ分だけ開けて森夜が座れば、心得たように身体を傾けて肩に頭を預けてきた。夜風に晒され冷えた身体に小さく熱が燈る。ふわりと頬を掠める髪からは、整髪料の甘い匂いがした。

ふわふわと浮ついた心で受け止めるこの現状にはまるで現実味がない。夢の続きを見ているのではないかとちらりと考え、目を閉じた。

「……どのへんで降りよう？」

森夜の問いに、陽介はしばらく考え込んだ様子だったが、すぐに顔を上げた。

「あんまり街に出ちゃうと補導されそうだしな

……。あつ、俺さ、海見たい」

「海？」

「うん、今くらいの時期ならガラガラで見晴らしも良さそうじゃん！」

「じゃあ、そうしようか」

「うんうん」

なんか冒険旅行みたいだな、と言って陽介は満足そうに笑った。

「適当な駅に着くまで、ちよつと寝ようか」

森夜の提案に陽介も頷き、ふたりは身体を寄り添わせて瞼を降ろした。

森夜は、この弛緩した身体の重さを知っている。反らせると肋骨が浮くほどに薄い胸だとか、筋肉が付き難いせいで無防備に見える柔らかい腹だとか、敏捷に動く筋ばった四肢だとか、そういった部分がありありと思い出せる。

花村陽介を構成する様々な要素を頭に浮かべることが出来ることを再確認して、森夜はようやく満足に寝ることが出来る。

目を閉じていても、彼が傍に居ることに安心できるこの距離が好きだ。

触れあつて眠る幸福に鼻の奥がずっと痛む。

そつと、自分よりもずつと細い腰に腕を差し入れ引き寄せると、されるがままに身体を移動させた。

暖かいこの体温が失われるのが恐くて、森夜はぎゅうと掌を握り締めた。

そうした切っ掛けが何だったのかは、今でもよく解っていない。ただ、森夜はそうするのが自然だと思ったのだ。

「……俺、涙腺ぶっ壊れちまつたみてえ」  
想っていたひとの喪失を実感して、あの時陽介はぼろぼろと涙を零していた。

陰口を叩かれても、謂れない中傷に晒されても、それでも彼はしゃんと立って周囲に気を配り、笑顔という仮面で全てを乗り切っていた。

その彼が初めて見せた涙に、色々な感情が爆発しそうなほど胸を押し上げて、ただただ慰めてやりたくて、失われていく体温をわけてやりたくて、細い身体を抱きしめた。ふざけて触れ合うようなものではなく、身体を密着させて彼を外部から護る。

骨の感触が伝わるほど痩せっぽちの身体は、微かに震えていた。

この腕の中に彼のやりきれないところがあって、今、それがぐるぐると渦巻いて昇華しようとしているのだと思った。

好いていたひとを喪ってしまふ気持ちがどん

なものなのか、森夜には理解出来ない。経験したことがないからだ。

だから、今の自分に出来ることを考えたとき、彼を抱きしめてやることしか思い浮かばなかった。

いや、それも全て後付けの理由で、ただ単に自分が抱きしめたくなったからそうしたに過ぎないのかもしれない。

「こういうの、女の子にしろよな」

そう苦々しく言いながら俯いた彼は、それでも振りほどくことなく森夜の首筋へと濡れた頬を寄せて身体を預けた。

その動作に嫌悪はない。

だから、選択は間違っていないかったのだと、今でも森夜は思っている。

泣きじゃくる彼に掛ける言葉が見つからず、しばらくの間押し黙って縋るように抱きしめていた。

やがて落ち着いた陽介は、その腕から身体を離し、照れ臭そうに笑った。

仮面としてではない、晴れ晴れとした陽光のような笑顔は、涙に腫れてぐちゃぐちゃなものだったけれど、今までに見た、どの笑顔よりも好まし

く綺麗だった。

そう。だから、森夜にとつての切っ掛けは、あの笑顔だったのかもしれない。

森夜はあの時から、彼を取り巻く全ての悲しみを跳ね除けて、ずっと笑っていて欲しいと思ったのだから。

どうやら夢を見ていたらしい。

深夜とはいえ、特殊な状況では眠くもならなかったのだけれど、隣に座る陽介の暖かい体温に引き込まれるようにして意識を失ったようだ。

森夜は座ったままの姿勢で腕時計をちらりと覗き込み、数時間が経過したことを知る。

電光掲示板に表示される次の駅を確認し、いまだ眠りの縁から帰らぬ親友の身体を揺すった。

「陽介、次の駅で降りよう」

「ん……、うん……」

ぼんやりと蕩けた瞳を彷徨わせる彼は、意外と寝起きに時間が掛かる。返事はしていても、眠りの縁から戻れない。ちからの入らない身体を支えてやりながら微笑した森夜は濡れた目尻に唇

を寄せた。

ちゅっと小さく音を立ててやると、一気に覚醒したらしい陽介がぱっと立ち上がろうとして体勢を崩す。

「危ない」

見越していた森夜は腕を引き掴んで、もとの場所に座らせた。

「お前が変なことすつからだろ！」

「変なことしたくなつたから、我慢出来なかつたんだよ」

「……寿命が縮むわ」

真つ赤になつた陽介の横顔に、森夜の屈託のない笑い声が掛けられた。

「あのな……」

「おっと、駅に着いた」

独特なイントネーションで綴られる聞き慣れない名前の駅に降り立つ森夜の後ろ姿を慌てて追いかけながら、陽介には一生かけてもこの相棒の考える全てを理解することは難しいのだらうと、半ば諦めにも似た気持ちでその広い背中を見つめた。

名前も知らない駅の、名前も知らない街に降り立つ。

急に心細くなり、森夜の方に視線を送った。

「やっぱり夜は寒いな」

街はほどほどに拓けているようだったが、人通りはない。点々と灯る街灯が寒々しい。

暖かい車内から気温の下がった夜の街角に出され、陽介はまだ温い手を頬に当て、息をゆつくりと吐く。さすがに白くなることはなかったが、すうと吸い込んだ冷たい空気に身体の内を揺られて目を細めた。

隣に立った森夜は首をすくめ、携帯電話を器用な手つきで操作した後にはちゃんと閉じてポケットに仕舞い、荷物を担ぎなおした。

「とりあえずどつか入るか」

「ん？ うん」

森夜の決断は大体において素早く適確だ。

迷いがなく歩幅が大きいので歩みが速い森夜の背中を小走りに追いかけて、陽介は数歩遅れて隣に並ぶ。

そこでようやく気付いたように緩められる歩調に内心苦く思いつつも、無言で前を向いて歩き続けた。

道すがらコンビニに寄り適当に惣菜や弁当を買い、森夜に連れられて来た先はごく普通のホテ

ルに見えた。

「ここ泊まんの？」

「この季節に野宿は無理だろ」

「や、カラオケとかネカフェとか、そういうトコに入るのかなと思ってた」

陽介の言葉にぶふつと噴出した森夜に、何がおかしいと睨みつけてやれば、悪びれもせずになおさら笑い声を高くした。

「どこ情報なの、それ」

それじゃ身体休まらないだろ、と至極もつともなことを言われ、陽介は反す言葉もない。

「もついい、入ろうぜ」

そう言つて門をくぐった陽介は、違和感を足を止めた。ホテルに付き物のフロントが見当たらない。

妙に薄暗く人気がない空間が広がっているだけだ。

悠々と追いついた森夜はパネルを素早く操作して部屋を選択すると、呆然と突っ立っている陽介の背を押し促す。

押されるままに部屋へとたどり着き、内装を確認して合点がいった陽介はじろりと森夜の顔を見た。

「咲月くん、ここってさあ」

「アミューズメントホテル」

上着を脱ぎ、陽介のジャケットも受け取りクロ  
ーゼットに仕舞う森夜は飄々と答える。

「って、ラブホじゃねーか！」

訝しげに目を細める陽介は、入り口から動か  
ない。

思ったよりも清潔そうな部屋の中は、白と黒の  
ツートンカラーを基調にしたシンプルなものだ  
ったが、ただのビジネスホテルよりは洒落たつく  
りになっていた。

しかしその中央に鎮座する、ダブルサイズのベ  
ッドだけが普通のホテルと大きく違う目的であ  
る証拠品に見えて、陽介はそちらを直視せずに森  
夜の無表情な顔を見やる。

「修学旅行でも連れてかれただろ」

何を今更、と首を傾げれば、ぶんぶんと頭を振  
って顔を真っ赤にした。

「それとコレとは違う！」

「ああ、一応あれは潰れたラブホを改修した、ち  
やんとしたホテルなんだったっけ？」

ガラステーブルに買ってきた弁当を並べてい  
る森夜は、陽介の不機嫌の理由がわからず首を傾

げる。

「そういう意味じゃなくてさあ」

ようやく入り口から動いた陽介は、森夜が座る  
ソファを素通りしてひとり用には広すぎるベッ  
ドへ身体を投げ出した。

ぎしと安物のベッドは陽介の体重を受けてス  
プリングを軋ませる。

「なんにも知らねえうちに連れ込まれたのがヤ  
なの！」

駄々っ子のように叫んでブーツを蹴るように  
脱ぐ。

ごんごんと鈍い音を立てて投げ出された  
靴を揃えて、森夜はベッドの端へ腰を下ろした。

「連れ込まれたって凄いい言い回しだな」

「だってそうじゃん」

むっつりと口を尖らせるのに軽く笑って、ぐし  
やりと髪を掻き乱すように撫でる。

「なんか手馴れてるし……」

「んー？」

ぼつりと呟かれた言葉は確かに耳に入ってきた  
ていたが、なんと答えれば彼の機嫌が治るのかを  
考えている間に、陽介は森夜の手をかいくぐって  
もぞもぞとベッドの上を移動し、クッションに顔

を埋めた。

「メシは？」

「……食べるけど」

精一杯不機嫌そうな低い声で答える。

森夜はそれに呆れたように小さく笑いを零し、テーブルに広げた弁当をベッドに運んだ。

「ほら」

「ベッドで食うのかよ」

差し出されたものに陽介は鼻白んだが、結局はその場に胡坐をかいて弁当に手をつけた。

コンビニの弁当は味付けが濃く、水分が少ない。それでもサラダや惣菜のおかげでそれなりの食事を摂ることが出来た。

ペットボトルのお茶で流し込むように食事を終えて、陽介の機嫌も多少上向いたらしい。

「お前のメシのが美味いよな」

「ここで料理が出来れば作ってやるけど」

「キッチン付のホテルとかあればいいのに」

半ば真剣にそうぼやく。につこりと優しく笑ってから、森夜は陽介から空いた弁当の容器を受け取り、レジ袋に詰めてまとめてゴミ箱に捨てた。

「俺、先に風呂入ってくるわ」

するりと身軽な動作でベッドから抜け出し、シ

ヤワールームに消えていく後姿を見送った。

森夜はすることがなくなり、床に足をつけたまま上半身だけをベッドに倒した。

ネットで調べたホテルの評判はそこそこで、シートからは洗剤の清潔な匂いがする。それなりに落ち着けるねぐらを確保したつもりだったが、不機嫌そうな陽介の顔が浮かんた。

彼の一举一動に一喜一憂している自分が情けない気もしたが、それでも彼が笑顔で居てくれることが今の自分には重要だと思える。刷り込みに近い感覚だが、彼が理不尽な涙を流すと、心臓が軋むように痛む。すべての痛みから遠ざけたいと願うのは親友としての領分をとくに超えていると思うのだが、ついつい構ってしまうのだ。

陽介もそれを知っていて、過保護に寵愛しようとすれば反発して無茶なまねをするので、最近ではようやく互いの干渉の仕方を学んで、並んで歩けるようになってきた。

ずっと傍に居たいと思ったからこそ、面倒でも傷ついてでもふたりの境界線を探ってきたのだ。

誰かと歩調を合わせることはこんなにも困難で愛しいのだと、陽介が気付かせてくれた。

しかし今回ばかりは一体なにが不満だったの

か、と考えても答えは一向に出てこない。様々な仮定が頭を駆け巡る。

初めて得た親友という存在は森夜の中で良くも悪くも多くを占めている。

ぼんやりとそんなことを考えていると、ぱたぱたと軽い足音がベッドへ戻ってきた。

「何、寝てんの？」

ひよいと覆いかぶさってきた体温と共に光が遮られ、森夜は瞼を持ち上げた。

濡れて普段よりも色が濃くなったキャラメルブラウンの髪がべったりと張り付いている。

がしがしとタオルで水分を拭きとれば、柔らかい毛質のせいなのかほわほわと四方に跳ねる髪は洗いたての猫を連想させる。

あどけない姿にだらしなく緩む頬を隠し、森夜は努めてゆっくりと立ち上がった。無防備な猫へは、不用意に手を出すと警戒させてしまう。

「……寝てない。おれもシャワー行くよ」

「おう、いつてらっしゃい」

バスロープのままで髪も乾かさずにベッドに潜り込む陽介に、眠かったら先に寝てもいいと声をかけて自分もシャワールームに向かった。

森夜の入浴は短い。

シャワーを浴びてほどほどに温まり、ドライヤーで髪を乾かしバスロープを羽織って部屋に戻ると、部屋の灯りは点いたままだった。

「陽介？」

なるべく物音を立てないようにベッドに近寄るが、布団のふくらみは微動だにしない。

自分を待っている間に寝入ってしまったのだろう。

森夜は電気を消して陽介の隣にもぐりこんだ。彼の体温で温まった布団は心地よくて、うとうとと眠気が襲ってくる。

薄暗がりの中、ちからが抜けた腕に、陽介の指先が触れた。

「……ん、起こした？」

先ほどは声をかけても反応が無かったが、ベッドに入ったことで彼を起こしてしまったのかもしれない。陽介は他人の気配に敏感なところがある。

申し訳なさそうに声を潜めた森夜に、陽介はゆるく首を振った。

「いや……大丈夫」

布が磨れる音がして、陽介は身体を滑らせて森夜との距離を縮めた。石鹸の匂いが強くなって、



頬に湿った髪感触が伝わる。

呼吸の音すら生々しく、細い風音が布団の中で行き来した。

「眠れないのか？」

環境の変化や今後のことを考えれば、ゆっくりは眠れないかもしれない。

森夜の言葉に陽介は答えず、指先が腕を辿り、肩口から胸元、首筋と顎を撫でていく。

「くすぐったくなーのかよ」

「おれはそういうの平気だから」

つまらないな、とぼやく陽介が上半身を起こし、するりと頭の後ろに腕が回る。あ、と思った時には唇は重なっていた。

柔らかい肉が鼻先に突きつけられれば、半ば無意識に口を開いてそれを受け入れる。しかし陽介の唇はただ自分のそれに押し当てられるだけで、望んだものは進入してこない。

焦れて噛み付くように舌を捻じ込み進入を図ると、陽介は首を振って逃れた。

「ふはあ」

息継ぎの間抜けな音が漏れ、身体を擦って絡みつく腕を振り解こうとする陽介に、むっと眉を寄せる。

「おい、陽介……」

「なんだよ？」

「……いや」

平坦なトーンで不思議そうに返されてしまったのは、不機嫌な声を出してしまったことが子供のよう之余裕が無く思われている気がして、森夜は冷静なふりを装った。

精一杯、空気を壊さないような甘く低い声を作って彼の耳元に囁く。

「ディープリキスしたい」

「……どストレートだな」

「舌出して」

ちゅ、ちゅ、と軽く啄ばむように唇を吸えば、

ふふと鼻に抜ける声で笑う。

掌で踊らされているのはこちらの方だと思いつつ、森夜は柳腰に回した腕にちからを込めて引き寄せた。

シャツが皺を刻みながら、陽介の身体を押し流す。

「んー」

ふ、と寄せた唇に濡れた感触が伝わって、森夜は喜んでその滑る肉を口に含んだ。

綺麗に並んだ歯列を辿り、口蓋を擦れば陽介の

背筋が伸びる。跳ねた身体が及び腰になるのを許さずに追いかけて、唾液を嚙り上げた。

喉が鳴る音が響く。

そうやっているとき、鼻で息をするのも息苦しくなり、空気が吸えるだけの隙間を作って荒く酸素を取り込んでいる間に陽介の唇から嚙下出来なかった唾液が零れる。

「くちがだらしがないな」

「うる、っせえ」

覆い被さって濡れた顎を舌でなぞる。触れるたびにびくりと震える身体に隙間なく密着して、どちらのものかわからない盛大な鼓動が響くのを楽しんだ。

「なあ、咲月さあ」

言い淀む陽介に、うん、と小さく返事を返す。彼は決心を固めるように唇を軽く噛み、顔を上げた。

「……俺とえっちしたい？」

低い抑えた声が、脳髓を揺らす。

うるたえた陽介の頬は、暗闇でわからないがきつと真っ赤になっている。

同じく、森夜の頬も熱い。

「え、えーと、それは……」

「あ、触りっことかじゃなくて、……俺ん中突っ込みたい、とか、思う……か……？」

しどろもどろになりながらも、直接的な言葉で説明を続けようとする陽介に、森夜は驚き固まる。その様子を見て、慌てて上半身を起こす陽介によって布団に冷気が流れてくる。

「ちが、別に誘ってるわけじゃねーぞ！」

「解った、解ってるから、陽介寒い」

「あ、ご、ごめん」

腕を引き寄せ布団を掛け直す。細い少年の身体は緊張と羞恥で熱を持ち震えていた。

「……えーと、悪い。おれ頭動いてないかも」

「や、急に变なこと言ってる悪い……」

冷静さを取り戻した陽介は、横になったまま頭を抱えた。

「お、俺は、お前に突っ込みたいとか、あんまり思わねーんだよ、な」

ぼそぼそと口の中で呟く過激な言葉が、頭の中でリフレインする。

どういった意図で語られているのだろうか。森夜は困惑して陽介の言葉の続きを待つことしか出来ない。

「かといって、突っ込まれたいわけじゃない」

「まあ。おれもお前も男だし」

「うん……、でも、なんか、そういう雰囲気だったじゃん……」

「ふんいき……」

陽介は鋭い。そして、軽薄そうに見える外見に反してバ力が着くほど律儀で正直だ。

森夜の中にあつた小さな期待に気付きながらも、雰囲気流されることも出来ず、乗ることも出来ず、恐らくは決死の覚悟で彼の真意を測ろうとしている。

こういうときは、誤魔化さずに自分の気持ちを飾らず伝えるべきだろう。森夜は乾いてしまった唇を舐め、陽介の顔を見返す。

「おれは……陽介とそういうことをしたい、って思ったこと、あるよ」

「うん」

想定範囲内だったのか、陽介は照れつつも頷く。

「っていうか、まあ、そういうのを調べて、挿入するモーソーをしたこともある」

「う……ん」

一瞬固まりかけて、それでもまた頷いた。

「……正直に言っと、自分が女役になる予定は考

えて無かった」

「おいっ」

「いや、だって、ずっと男やってたしさ」

「俺だってそうだよ！」

ぐわー信じらんねえ。

そう呟いて、陽介はごろごろとベッドの中で落ち着きなく寝返りをうつ。

そのままベッドから落ちそうで、森夜は背後からその背中に抱きついた。

「……むしろ、陽介がそんなこと色々考えてたことがびっくりした」

「俺ってそんなガキっぽい考えに見えた？」

「違う。いれるとかいれられるとか」

「……俺だって男だし、わりと、そりゃ興味はあるんだ、よっ！」

くつと腰に廻った森夜の腕に力が入り、陽介は慌てて首を振る。

「何も、今すぐってわけじゃ……」

「うん……」

森夜の暖かい掌は、陽介の下腹部をそつと撫でる。

臍の下辺りを優しく弄られ、その熱と動きに身を強張らせた。

「お、おい……」

「男同士でも、ここにいられるって、知ってたんだ」

「そりゃ、まあ…… A Vとかでも、あるし」

あからさまな場所には一切触れてこないが、森夜の筋張った手が腹を這うとぞわぞわと背筋を何かが駆け上がるような感覚に苛まれた。

熱い掌が皮膚越しに内臓を辿る。

この奥に、彼を受け入れられる空間があるのだ。身体の中心部に熱が燈って頭の芯がぼんやりと痺れる感覚に、陽介は内心焦って彼から離れようとするが、上手くちからが入らない。

「ちよつと、咲月……」

「ごめん。おれ、興奮してる」

はぁ、と溜息をつく森夜の様子に、いよいよ陽介は目を白黒させて身体を抜った。

「落ち着けっ」

「落ち着けない。お前、好きな子が自分とのえつちのために色々考えて恥らってるトコ見たらどう思っ？」

「……くる」

「だろ」

「でも、そこでがつつかれたらビビる女の子の気

持ちも、今わかった！」

陽介の指が腕に掛かる。

一般的な男子高校生としての身体能力から見ても、彼は非力というわけではない。

むしろこの一年、テレビの中という非日常的な空間で異形の怪物を相手に身体を動かしていたので、そこいらの男子よりは俊敏で力がある。

このままにしておけば引き剥がされることは目に見えているので、森夜は先手を打った。

太腿で陽介の両足を挟み込んで身動きを封じ、背中に押し掛かる。

このまま腕を抑えておけば跳ね除けられることはまずない。

ぎよつと目を剥いた陽介は、背後にある熱い身体に冗談ではすまされないと悟った。

しかしこのまま流されることは避けたい。

「お前なあつ、初めてのえつちだつーのに相手をマウントしてヤンのかよ！」

「まあまあ、落ち着いて」

「お前が落ち着け!!」

「おれは平常心です。平常心で陽介とやりたいと思ってます」

「俺の意見は!! 強姦、ダメ、絶対!」

双方合意のものでないセックスはレイプに等しい。陽介の主張は正しい。正しいからこそ、森夜の拘束はほんの少し緩む。

一瞬の隙を見逃さず、陽介は身体を捻って森夜と向き合う体勢になる。

視線ががち合って、噛み付くように唇を奪われた。

がちがちと不器用に歯が当たって、その感触すらも快感になる。

うつとりと、火の燈った獣のような視線が肌を刺した。

「……ふっ」

一息ついて、間を繋ぐ銀糸が途切れる瞬間までを見届け、森夜はようやく押さえつけていた親友の身体を開放した。

触れ合ったままではあるが今までのような圧力が消えて、陽介は安心したような、しかし心許無いような気持ちになる。

「悪い、ちよつと興奮でネジ飛んでたかも」

「きつちり締めなおしておけ、バカ……！」

ばつが悪そうに覗きこんでくる瞳には、理性を取り戻したいつもの静寂があった。

「お前、マジでケダモノ。びびるから！」

「反省します。ゴメンナサイ」

そう言う彼は、普段の自信に溢れた精悍な顔を歪め、眉尻をしょんぼりとほんの少しだけ下げた。

その表情は、忠実な獵犬が取り返しのつかない失態を飼い主に晒したかのように尻尾を丸めている様を連想させる。

どうやら本気で悪いことをしたと思っているらしい。

「……ま、まあ、俺も本気でキレてるわけじゃねーけどさ。そ、そういうのは、合意を得てから、な？」

春からの事件を共に追いかけていた頼りになるリーダーでもあった相棒の、そんな見慣れない表情を見せられては陽介も強くは責められない。

これを見越しての演技であるのなら、森夜の根性は相当なものであるが、どうやら彼も真剣に反省しているようだ。

「お前がちゃんと拒んでくれて良かった」

あのまま勢いで身体を繋いでいたら、おそらくどちらにも確執が残る。

「陽介は頭がいいな」

「……お前はなんで頭いいのにバカなんだ」

「バカとはなんだ」

「そこは怒るのかよ」

「ごち、と軽く頭突きをされて発作的に笑いが零れる。緩んだ頬に啄ばむようにキスが贈られ、森夜の唇が顔のあちこちに触れた。

ふわふわと柔らかいものが当たる感触は純粹に気持ちよくて、陽介は目を閉じてその優しい温もりを享受する。

ちゅ、ちゅ、と可愛らしい音がした。

「んん……ん？」

ふと、足の辺りに芯を持ったような硬い熱の感触を認めて目を見開く。

「えーと、咲月さん？」

くるりと小首を傾げる。

「なんでしようか陽介さん」

森夜も律儀に首を傾げた。可愛くはない。

「あなたの息子さんが、ご起立あそばれてましてよ」

「文法がおかしいわよ陽介さん」

「知るか!! ちょ、なに、お前やる気満々じゃん!

「自制できてないじゃん!」

「自制で鎮められるならAV男優になれる」

「はいはいご立派ご立派。じゃなくて!」

陽介は顔を赤くして森夜の胸の辺りへ掌を置

き、ぎくりと身を強張らせた。

見た目にはわからないがしつかりと付いた筋肉の向こうで、どくどくと熱い血が循環している感触がわかる。表情に出ていなかった分、その衝撃は大きかった。

「お前、まだ興奮してるん？」

「……好きなやつとふたりきりで、ラブホで、風呂上りで、同じベッドに寝てて、興奮しないやつが居たとしたら聖者がインポだ」

「それもそうだ」

「でも、今日はやんない」

興が冷めたわけではない。

流されて関係を結ぶことに対して、自分でも気が引けたからだ。特別で護りたい相手に、後々傷つくような行為を自分の欲情を押しつけてまで続行したくない。

そつと離れて陽介の隣りに横臥する森夜の顔は、小さく笑っていた。

「う……ん」

陽介は曖昧に頷く。

話に出したのは自分でも、覚悟が圧倒的に足りなかった。触り合い、セックスの真似事をしてきたとしても、それはあくまでも互いの快感を求め

て合意の上で行ってきた情事だ。

身体の中に触れられれば、今でも本能の部分で腰が浮きそうになる。その奥の、自分ですらろくに触れたことのない身体の内側に彼が触れるとなれば純粹に恐怖が先に立つ。

そういったことに気付いたからこそ、森夜は今、自制してくれているのだろう。

「……サンキュ」

「まあ、おれは陽介とならいつでもしたいよ」

「うん……」

「いつでもしたい」

「二回は言わなくていい」

「大事なことなので」

「お前なあ……」

呆れて眉を寄せる陽介に、それでも真摯な眼差しで森夜は彼の瞳を覗き込んだ。

「……でも、陽介がいつだっていうまで、ちゃんと我慢する。ちゃんとセックスしたいから」

そう言つて森夜は笑つ。余裕はないだろうに、陽介を安心させるために、まだ笑つてくれる。

「……うん」

あ、なんか、やばい。嬉しい、かも。

じわ、と胸が熱くなる。

押し付けられる情欲ではなく、彼はきちんと陽介の言い分を聞いて、ふたりが満足できるかたちを探していると理解できた。

ぎゅっと心臓が締め付けられるように幸福感が押し寄せてきて、陽介は隣りに寝転んだ彼に自分から頬を摺り寄せた。

「誘惑」

「してねーからな」

「……チツ」

「でも、ちゃんといいよって言うから」

「早めによろしく」

正直なやつだなあ、と陽介が笑つ。

森夜はその笑顔を見ると、少しだけ腹の奥が埋まるような気がした。

その夜はお互いの手と口で満足するまで精を吐き出し、倒れるように眠り込んだ。

本編へ続く